



電話

短編

からの

リヨウコ

山中與隆

YAMANKA TOMOTAKA

リョウコからの  
電話

---

山中與隆

## 目次

リヨウコからの電話

1

編者あとがき

55

# リヨウコからの電話

作 山中與隆

元旦の午前中、私はマンションの高階の自室から、コタツに入ったまま、掃き出しの大きな窓いっぱいに見えている極楽寺山を眺めていた。この冬は雪が早く、師走から何度も山の半分から上くらいを薄っ

すらと雪化粧している。昨夜ずっと雨の音が聞こえていたが、朝起きてみると、いつの間にか雨は雪に変わったらしく、山だけでなく眼下の家々の屋根も白くなっていた。屋根の雪は、朝のうちに陽射しが出て消えたが、山は白いままだった。ときどき山中で風が吹くのだろう、木々の雪を巻き上げて雪煙が上がるのが見える。ニューイヤー駅伝のテレビをつけていたが、喧しくなつて消した。そして私は、

山の斜面のあちこちで立ち上がる雪煙を飽きずに眺めた。

そろそろ年賀状が来ている時間だが、まだ一階の郵便受けまで行っていない。私は喪中はがきを出さなかつたから、普段どおりに年賀状は来ているだろう。

そのとき電話がなつた。受話器を取ると女の声で、「リョウコです。明けましておめでとうございます」

と言う。

リョウコは妻と同じ名前だが、知り合いには妻以外にそのような名前の女性は思いつかない。それに、いきなり新年の挨拶を、しかも苗字ではなく名前で言ってくるような女性は、東京に嫁いでいる娘くらいしかいない。娘からは昨夜「行く年来る年」が終わった頃かかってきた。

「こちら松本と申しますが、失礼ですが、どちらの

リョウコさんでしよるか？」

と訊いた。

「健一さんでしよ。リョウコですよ、リョウコ。去年一緒に山に行った・・・」

そう言われても、思い当たらない。だいたい去年一緒に山に行ったのは、妻以外にはいない。いや一人いた。妻と一緒に宮島の弥山に登ったとき、初めてだから一緒に登っていいですかと言って、ついて



来た女性がいた。私たちの歩みがあまり遅いので、その女性は途中から先に行ってしまった。もちろん名前などお互いに名乗りあっていない。

「去年のいつですか？」

「あら、去年と言っても、まだ十日も経っていませんよ」

「僕、松本健一と言いますが、別の松本さんと間違っていますか？」

「・・・でも、松本健一さんですよ。間違いないと思いますけど・・・リョウウコですけど、リョウコ」

そこまで言われても私は、その人のことを思い出さなかった。

「そうですか。じゃあ、また電話しますけど、なんとか思い出してくださいね」

リョウウコという人は、何故わからないのだろうか

怪訝そうなようすで電話を切った。

妻と私は、目の前の極楽寺山をはじめ、宮島の弥山など近在の山にはかなり頻繁に登ってきた。登るときにはいつも妻と一緒にだった。その妻が昨年の十月に心臓病で急死してから、私は一度も登っていない。

電話では、十日くらい前に一緒に登ったと言って

いた。そう言えば・・・。

ぼんやりした映像が少しずつはつきりするように、私は十二月の下旬の珍しく良く晴れた日に、一度だけ極楽寺山に一人で登ったのを思い出した。今朝電話の時にはぼんやりしていて忘れていたが、確か一回だけ登っている。でも登ったのはもちろん一人で。その日私は、いつまでも家の中でふさぎこんでいてもいけないと思つて、重い腰を上げたのだった。

見慣れた山道の岩や、木を見ても胸に込み上げるものがあつて、誰も見ていないのをいいことに、流れる涙も拭かずに歩いた。それでも、頂上の展望台に着いて、四国まで見えるような穏やかに晴れ渡つた瀬戸内海を見る頃には、心は少し軽くなつていた。ただこのときは、頂上を目の前にしてアクシデントに見舞われ、順調な登頂とは言えなかつた。十日くらい前と言うのは、そのときのことだろうか。

その日は久しぶりに天気良くて、登る人はたくさんいた。私は九時ごろ登り始めたが、私が頂上に近づくころには、もう下りて来る人たちに出会った。度々登っていたので、顔見知りになって挨拶する人も何人かいたが、そのときは確か顔見知りの人には出会わなかったと思う。私はその、十二月に一人で登ったときのことを、時系列的に思い出して見た。

ゴルフ場の上の山陽自動車道を越える陸橋を渡つたところにある登山口までは車で行つた。登山口の道路脇にはすでに何台も登山者の車が泊めてあつた。私は少し空いたスペースを見つけて駐車した。大きな目の石ころを拾つて後部車輪の後ろに置いた。三角形の車止めにはちようど良い石だつた。いつもは、石を見つけるのは妻の役目だつた。駐車している他の車は、ちやんとした車止め用具をしている人が多





た。私は、ゆっくり歩いてゐる妻の姿を思い出してしまった。私はそれを振り払うように歩を速めた。

一緒に登るときも、妻があまりにも遅いので、二百メートルおきに立っている標識まで私だけ先に行つて、そこで止つて後からやつて来る妻を待つことにしていた。妻がそこまで来ると、私は次の標識まで先に行くのである。このやり方はなかなか良かったので、大抵はそうしていた。

十二月のときも、頂上まであと千八百メートルと書かれた標識からスタートして、最初に出てくるベシチのある千六百メートルの標識のところでは立ち止まって、後ろを振り返った。待っていても妻が登ってくることはない。私は水を一口飲んでまた登り始めた。

千四百メートルの標識でも、千二百メートルの標識でも私は立ち止まった。そうしないと妻を置き去

りにしてしまふような気がしてならなかつた。

頂上まで千メートルの標識は、小さな溪流を渡るところにある。妻はよく溪流の水で顔を洗つたり、タオルを濡らしたりした。この日は晴れていて空気は冷たく、私はほとんど汗もかいていなかつたが、溪流の水辺に降りて顔を洗つて、汗ではなく頬の涙を洗つた。

登山道は、ここから急な登りになる。丸太や石で

段々が作つてあつて登りにくくはないが、この辺りから息が切れ足に疲れが来たりする。

あと八百メートルの標識のところでは、この山で顔見知りになつた同じ町内の男性と立ち話をしたことがある。そのとき彼は、二年前に娘さんに誘われ、初めてここに登つたときは、這いつくばるようになつてやつと頂上にたどり着いたと言つていた。これではいけないと思つて週に三回は来るようにしたら、

みるみる足が強くなつてきて、今ではここに来るのが楽しみでこそあれ、苦しいと言う感覚はまったくなくなつたとも言つていた。

その話を聞いた私たちは、自分達もあの人のように長く続けようと話し合つたものだ。

あと四百メートルの標識の少し手前に東屋の休憩所がある。竹箒などの掃除道具がきちんと整頓されて置いてあり、この登山道が常に綺麗に保たれてい

るのは、これらを使つて掃除をしてくれる人がいることを物語っている。

私たちが極楽寺登山を始めたころは、この東屋にたどり着くと、そこで休んでいたが、数回目くらいから通過するようになった。しかし、この日は東屋のベンチにしばらく座った。目の前に大きな白い反射板がある。詳しくは知らないが、地理的な距離を測定するための物らしい。極楽寺山の北東にある鈴

が峰にも麓から見上げると同じような反射板があるのが見える。

実は妻と登っているとき、私は便意を堪えきれなくなつて、反射板の金網の囲いの陰で野糞をしたことがある。次に登つたとき、気になつて見に行くと、糞は跡形もなく無くなつていた。おそらくイノシシが食べたのだと思う。使つた紙の方は残つていたので、リュックにあつたビニール袋に入れて持つて帰

り、家で処分した。登山道にはあちこちにイノシシが掘り返したような跡があるから、紙さえ残さなければ、山を汚さないですむことがわかった。妻は一度もしなかつたが、私はその後も二回ほど野糞をした。

東屋を過ぎると直ぐにあと四百メートルの標識がある。ここでも私は立ち止まって後ろを振り返った。ここは東屋から五十メートル位しかないので妻は待



つまでもなく現れる。

『そうだったな』と思いながら私は歩き出した。それからしばらくすると、整備されたコンクリートで固められた石段と、木で作られたしつかりした階段がある。ここは十年くらい前の豪雨で土砂崩れがあつて、長い間このルート、つまりいま私が登つていゝるルートは使えなくなつていたところである。

このルートは、木に覆われていて途中ほとんど展

望がない。この階段の前後だけが瀬戸内海と宮島や  
周辺の島が見渡せる。木の階段を登りきったところ  
では、樹木の枝の隙間から我が家のマンションが見  
える。それを見つけたとき、私たちは、いつでもリ  
ュックに入れていた双眼鏡でマンションの自分の部  
屋を眺めたものだ。あるとき、シーツを洗濯してベ  
ランダに干して出かけたことがあった。そのシーツ  
がはつきりと見えるのを喜んで、かわるがわるに双

眼鏡をのぞいた。

階段を過ぎてしばらく行くと頂上まであと二百メートルの標識がある。その標識は道を曲がって直ぐのところにあるので、私はときどき見逃して、極楽寺の山門まで行ってしまうのだった。山門のところには、極楽寺まで百五十メートルの案内がある。見逃したときは、ここで妻を待った。山門をくぐったところに、これ以上ないと言うくらい優しい顔をし

た地蔵が立っている。ここを通るとき、往きも帰りも、『今日も無事登らせて頂いてありがとうございます。ごさいました』と二人で手を合わせることにしていた。

この日も、私は手を合わせてから頂上に向かった。その後ゆるゆるとした坂がしばらくあつてから、頂上の極楽寺まで最後のきつい石段がある。これは六十段ちよつとあるのだが、一段一段が高くて、疲れた足にはこたえる。この日私は、最初の数段を上

ったところで、右足のふくらはぎに痙攣を起こしてしまった。石段を登り切るとゴールなので、ゆつくりなら行けるかと思つたが、特に右足の状態は一段も登れないほどだつた。腰を下ろして足を休めようとしたが、それも出来ない。腰を下ろそうとすると、痙攣した部分が酷く痛いのだ。しかたなく立つたまままで痛さをこらえていた。数分すると少し痛みが和らいだので、一段登つて見た。やっぱりだめだ。し

かしここにいつまでもじつとしているわけにもいかない。私は、痙攣していない方の足で一段登り、痙攣した方の足を右手で引っ張り上げた。左手は石段の前の方に掴まつてバランスを取つた。『這いつくばつて登つた』と言う顔見知りの人の言葉を思い出しながら、私は長い時間かけて石段を登りきつた。その間に一組頂上から降りてくる人たちがいたが、私は彼らが通り過ぎるまでなにくわぬ顔で立ってやり

過ぎした。ただ立っているだけでも痛みはかなりのものだった。

何分間格闘していたかわからないが、頂上に着いたときには、大事業を成し遂げたような感慨があった。その間、登り始めてからずっと私の心につきまといつていた妻への感傷は忘れていた。

頂上の展望台には屋根がありベンチもあつて、最初に書いたように遠く四国まで見える素晴らしい展

望台だ。ただし周りの大木のために、見渡せるのは南側と西側だけだが、この日は四国の石鎚山の頂上付近がはつきりと確認できた。私はしばらく足の痙攣のことも忘れて眺めていた。しかし、足をふみ変えようとしたときに痙攣の痛みに襲われて、ベンチに倒れるように座り込んだ。座っても痛かったが、座り方を工夫すると痛みは和らいだ。

私は長い時間、痛みが退いていくのを待ちながら



座っていた。そのうちに汗で濡れた身体が寒くなつてきた。あまり冷え切らないうちに下りなくてはない。その前に、ミカンを持って来ていたのを思い出したので、リュックから取り出した。出かけるときテーブルにあつたの入れて来たのだ。ミカンは二つあつた。今までなら二人で一つずつ食べるところだが、この日は続けざまに二つ食べた。今日はそれで何の問題も無いわけだが、妻の分まで一人で食

べてしまったと言ふ良心の呵責のよ様なものが心に残った。

座っているだけなら痛みもなくなつたようだったので、水やミカンの皮をリュックに収めて、下山にかかった。このとき他の登山者はその付近にいなかった。人気の無い展望台を振り返つたとき、『私は一人きり』と言ふ感情に強く襲われた。

六十段の石段を下り始めたら、痙攣の痛みが再発

した。二、三段下りてはしばらく休みながら、何とか石段は下りきつたが、それから先も段差を降りるたびに痛みに襲われて、その場に立ち止つたまままで休んだ。

妻は、下りには強くて、登山口まで四十五分か五十分しかかからなかったが、この日私は二時間かかって、登山の起点にしている頂上まで千八百メートルの標識にたどり着いた。そこから僅かに下りにな

っている平坦な舗装道路を、車のところまで歩くと  
きには、本当にホツとした。私は信仰を持っていな  
いが、神に感謝したい気持ちとはこのことだと思  
うのだった。

車が安全に運転できるかが少し心配だったが、何  
とか家まで無事であった。

これが十日ほど前の、妻が亡くなつてから初めて

極楽寺山に登ったときのことである。

足など痙攣することなく何度も登ったのに、この日痙攣を起こしたのは、久しぶりだったこともあるが、妻と二人で登ったときよりもペースが速かったことが原因かもしれない。

登ったのは、間違いなく一人だったが、その日途中で誰かと言葉を交わしたような気がする。苦労しながら下山して、頂上まで千メートルの標識のそこ

ろで、急な坂を下つてきて痙攣した足がかなり痛かったので、そこにある十段ほどの木の階段に腰を下ろして、かなり長い時間休んでいたとき、上は半そでシャツで真っ黒に日焼けしたおじさんが登つてきて、

「上？、下？」

と私に話しかけた。登山中か、下山中かを聞いたのである。私が、

「下りてます」

と言うと、

「もう一回どう？」と言つてから、私がただ笑つて  
いると、

「じゃまた会いましょう」

と言つて、力強い足取りで私の横をすり抜けて登つて行つた。

いや、これではない。女の人と言葉を交わしたよ

うな気がする。

どの辺だったろうか、登るときに一人女の人を追い抜いた。そのとき

「お先に」

と声を掛けたが、顔も見えていないし、追いつくときに前に行くその人のリュックにも、服装にも記憶がない。背が高い人ではなかったような気がする。その人はかなりゆっくり登っていた。しかし、頂上直



前の石段で私が一段ずつ立ち止まりながら進んでいくときに、スーツとその人は私を抜いて行つた。その人は笑顔で

「お先に」

と声をかけて行つたような気がするが、顔は覚えていない。それからしばらくして私が頂上に着いたとき、展望台には誰もいなかったから、多くの人があるように、彼女も極楽寺の奥の方か、蛇の池

の方に行つたのかもしれない。

仮にその人がリョウコさんだつたとしても、どうして電話なんかかけてくるのだらう。そもそも電話番号を知っているはずもない。電話でいきなり、「リョウコですよ」などと言うのだから、もともと知っている人に違いない。

それからしばらくは足の調子が良くなくて、近所

のスーパーに買い物に行くのにも、何となく痙攣が来そうで、不安で仕方なかった。それに天候不順もあつて、一度も山には登つていなかつたのである。

リョウコと言う人から謎の電話があつた翌一月二日は、元旦の夕方から雲ひとつない天気になり、朝起きると、快晴であつた。山には半分から上に雪があつたが、私は急に登つて見たくなつた。冬に備えて妻と二人で買いに行つたのでカンジキもある。

登山口まではまったく雪などなかった。こんな日でも、たくさんさんの車が停まっていた。みんな頑張っているんだなと感心した。今日はきつと上の方はかなり雪があると思う。私たちがカンジキを買ったのは、ここで顔見知りになった人、そう初めてのとき、這いつくばるようにして登ったと言っていた人が、冬に頂上直下の例の石段が凍っていて転んだと言っていたので、やがて来る冬に備えて買ったのだ。

私は前回のことがあるので、入念に準備運動をした。それからペースもかなりゆっくり登ることにして、歩き始めた。二百メートル毎の標識で立ち止まったり、振り返ったりすることはなかったが、標識のところに来るたびに、「標識だ」と思うのだった。しかし涙が出たりはしなかった。

溪流を渡る頂上まで千メートルの標識のところでは、そこまで休憩なしで来たので、足の負担を考え

て腰を下ろして休んだ。登山道はややぬかるんでいて、脇の林の中には雪が少し残っていた。

そこからは、登るにつれて登山道にも雪が残っていたが、まだカンジキを着けるほどではなかった。私はザクザクと雪を踏みながら歩いた。

カンジキは東屋のベンチで着けた。ここまで足は大丈夫だ。

その辺りでは、雪が残っているだけでなく、石の

上などが凍っているような感じになってきていた。カンジキを着けて正解だった。長い木の階段とその前のコンクリートの階段は積もった雪がかなり凍り付いていた。

極楽寺の山門付近の雪はかなり深く、踏まれていないところは、くるぶしくらいまで埋まる。ただ登山道は踏みかたまっているので、ズボズボ埋まったりはしないが、カンジキがなかったら滑って危ない

ところだった。それにしても、雪が踏み固まっている状態を見ると、雪が降っても結構たくさん登っていることがわかる。私が家の中でふさぎこんでいるときにも、みんなはいつもと同じように登っていたのだ。

顔見知りの方が転んだと言う最後の石段は、雪も乗っているが、テカテカと凍りついた部分も見える。昼間に融けた水が夜凍るのだらう。今日は、天氣が



良いのに融ける様子はない。カンジキのおかげで滑る心配はまったくないが、私は痙攣を起こさないように、一段ずつ本当にゆっくりと登った。

登り始めたときには青空だったのに、いつの間にかすっかりガスがかかって頂上の展望台からは何も見えない。

ベンチに男性が一人座っていた。やはりこの山で見かけたことがあるかなり高齢と思われる男性だ。

俳優の笠智衆によく似た人だ。非常にゆっくり登る人で、自分で誰よりも遅いと言っていた妻も彼を追い越したことがあるそうだ。そのとき妻は、しばらく一緒に歩いて、少し話をしたと言っていた。

この日も彼は、笠智衆のように背筋をピンと伸ばし、目を細めてガスで何も見えないはずの前方を見つめている。風もあつて寒い。今日はアノラックも、その下に来ていたセーターも途中で脱ぐことは無か

った。ペースが遅かったただけでなく、気温が低いた  
めでもある。これでは展望台に長居はできないと思  
つたが、彼は悠然と座っている。

「明けましておめでとうございます。寒いですね」  
と声を掛けた。すると彼は、

「あつ、おめでとうございます。今日はお一人です  
か」

と言った。

私は昨年の十月に妻が亡くなつたことを言つた。

彼は、悔やみを言つた後、

「ご主人が、こうしてこれまでどおりここに来られる時には、きつと奥様も一緒に登っておられると思いますよ」

と言う。そして、

「お参りだと思つて登られるといい。ご主人の気持ちも、登るたびに楽になつてきますよ」

私が、妻のことを言うのに、少し言葉を詰まらせてしまったので、そのようなことまで言ってくれたのだらう。私は、前にも言ったように信仰は持っているが、このときは彼が言うとおりでなと思った。

親切な言葉に礼を言つて、私は下山にかかった。山門の地蔵に、無事登つてこられたことだけでなく、特に具体的な意味はなかったが、彼が言うようにも、妻と一緒に登つてくれているのだつたらと思つて、

その礼も心の中で言つて手を合わせた。

登山道はガスのため、まだ十二時前だったが薄暗かった。滑らないように気をつけながら時間をかけて下りた。妻が見守ってくれているような、ちよつと暖かい気持ちがあった。

車のところに来たときには、ガスだけでなく雪が降り出していた。

雪は時間とともに激しくなり、家ではマンション

のベランダにも積もり始めていた。私は薄暗い部屋の中で、一人きりの現実引き戻された。

去年は秋が無いと言われるほどいつまでも暑い日が続いたが、ようやく秋らしい日もあるようになった。私たちの極楽寺登山は絶好調だった。

「歳をとつても、筋肉は強くなるものだね」と確認し合い、

「今年は十回くらいしか来なかったけど、来年は百

回を目指そう」

と話したものだ。

妻を亡くしたのは、そう約束した何日か後だった。夜中に胸が痛いと言い出して、直ぐにもものも言えなくなつた。救急車で病院に行つたが、翌日息を引き取つたのだつた。

今年は正月の二日にもう登つたのだから、出足が



早い。妻と約束した百回を達成してみよう。

その後、リョウコと名乗る電話はかかってこない。

(了)

## 編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな  
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同  
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣  
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。  
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中  
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう  
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの  
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))  
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

## 著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も  
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた  
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴  
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの  
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら  
かの形で音楽が絡んだものにしたいたいと考えています。  
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し



たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

## 今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

### 既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

## 既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

## 三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

## 阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

## 四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

## 紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

## 短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力



- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

## 12 カルテット

## 最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

---

## リョウコからの電話

---

2022年9月30日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：

[www.photo-ac.com](http://www.photo-ac.com)

タイトル：南三陸町行者の道  
登山道苔とせせらぎ

作者：mie06さん

写真のID：4961465

[www.silhouette-ac.com](http://www.silhouette-ac.com)

タイトル：ザック姿の登山者

素材のID：126008

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>

---